

看護用品の解説

アメリカ婦人クラブから公看へ赤い自転車が 10 台贈られた。赤い自転車の後ろに白いペンキの塗られた訪問箱を乗せて看護活動を行っていた。乗り物の少なかった当時、機動力として大変貴重なものであった。

看護用品にまつわるエピソード

1955 年頃、子供たちにシラミが蔓延した。シラミ駆除のために保健婦は、赤い自転車の後ろにシラミ駆除のための薬を乗せて学校に行くことがあった。乗り物が殆ど無い時代であったため、赤い自転車に乗って保健婦がやってくると子供たちは喜んで自転車の後ろを追いかけて来た。在宅の結核患者を訪問するときも赤い自転車に乗っていた。当時、結核患者は社会から差別を受けており、保健婦の家庭訪問を周囲の人たちに知られたくないという思いが強かった。患者の家から離れたところに自転車を止めて患者に合いに行くが、患者やその家族から必ず言われることは「誰から（に）言われて、来たのか」ということであった。また保健婦活動に使われていた赤い自転車は、龕（棺桶）の色と同じだとして、その自転車を家の側に置かれることを拒否する住民もいた。

（仲田八重子，2004）

解説

小学校の校庭に自転車を乗り入れると、子供たちが物珍しく自転車の周囲を囲んだ。また、村内を自転車に乗って爽快に走るとき、女が自転車に乗っているということもあって、人目を引くなど公看を印象づけるのに役立った¹⁾。当時の公看の活動と共に、住民の持つ‘赤い自転車’へのイメージがいろいろであったことが分かる。

1) 与那覇節子：沖縄の保健婦－結核との戦いの奇跡－，保健同人社，P21，1983.

（名城一枝，2004）